

私にできること

福島県三春町立三春中学校

三年 只 野 裕理伽

私は昔から体育が苦手です。跳んだり、走ったり、みんなが好きなことが、私はなかなか好きになれません。

それは、私には生まれつき足に障害があるからです。だから私は、今までに何度も手術をしてきました。そんな時、いつも支えてくれたのは、家族や先生、友達でした。

母は、毎日病院で付きっきりで看病し、なかなか自分では移動が出来ない私の手伝いをしてくれました。父や姉は、よく病院に来て、話し相手や遊び相手になってくれました。

先生や友達、部活のみんなはメッセージカードをくれたり、学校生活では、いつも一緒に行動してくれたり、とても心強かったです。車椅子で学校生活を送ることはとても不安でしたが、みんなのお陰で、いつも通りの楽しい学校生活を送ることができました。

病院での生活でも私はたくさん経験をしました。それはいろいろな障害のある患者さんとのふれあいです。一人では歩けない人も話すことの出来ない人もいました。病気の症状は本当にさまざまです。でも、患者さんたちは、いつもにこにこ笑っていて、私まで元気になるしました。こんな笑顔になれ

るのも、患者さん達の食事や移動など、生活を支えている看護師さんや病棟保育士さん達の、仕事を超えた温かく優しい心遣いがあったからです。

でも私の心は、時に、不用意に自分の足に注がれる視線に、大きくざわつくのです。「どうして私だけこんなに嫌な思いをしなくちゃいけないの。私もみんなと同じく生まれたかった。」と。こんな気持ちになったことが、何度もあります。

でも今は、生まれつき障害があったからといって不幸だとは思っていません。たしかに、心のざわつきが全くなかったといえ、うそになります。

でも、この経験があったからこそ、私は病棟保育士になって、今まで支えてくれた家族や先生、友達など、いろいろな方々に恩返しがしたいと思うようになったのです。

そしてもう一つの契機は、あるテレビ番組で見た障害者の方々の姿です。そこには、重い障害があっても、さまざまなことに挑戦し、一日一日を大切に、精一杯生きる姿がありました。それを見て私は「障害があるかないかなんて関係ない。私は今までいろんなことから逃げていたんだ。何事もやってみなくちゃわからない。私もいろいろなことに挑戦してみよう。私にも人の役に立つ何かができるはず。」と思うようになったのです。

それから、私は少しずつ自分に挑戦することになりました。

中学一年の冬のことです。私は車椅子でダンスを踊りました。グループのみんなにも協力してもらい、上半身だけでなく、隊形移動や回転も一緒にやりました。音楽に合わせて体を動かすことは気持ちのいいことです。発表会で踊れたときは本当に嬉しかったです。

中学二年の避難訓練は、初めて自力で避難しまし

た。階段を一段一段降り、防火扉を開けて30cmほどの障害を幾つもまたいで行きました。時間もかかりました。と同時に、友達の手まといにならないかと心配にもなりました。そしてその時、私は「これじゃ、焼け死んじゃう。」とも思ったのです。自分のことは自分でできるようにしたい。それは私の切なる願いになりました。私を大切にしてくれた人への感謝の気持ちは、この命を最大限に生かして生きることだと思ったからです。

中学三年になり、滝桜ウオーク約8kmを歩ききました。滝桜は日本三大桜の一つです。樹齢千年以上と言われるその桜は、伸ばした枝を何本もの支柱に支えられています。それでも、全身で咲ききっている姿に胸を打たれました。無心に自分の役割を全うする姿を見て、自分もまた頑張ろうと思いました。

そして、三年間続けてきた部活動。私は、卓球部に所属しています。新人戦の時は、手術の後でしたから車椅子で出場しました。その大会で、県大会まで行くことが出来たのです。車椅子は立っている時と目の高さが違います。移動するために車椅子も操作しなければなりません。とうとうフルセットにまでもつれこみました。その私を、チームのみんなや先生方がずっと応援してくれました。だからこそ、正々堂々と粘り強くプレーすることができたのです。そして得た勝利の喜びは、最高でした。それだけではありません。多くの人が自分のことのように喜んでくれたのです。それは、喜びを何倍にも膨らませました。

私は、まだまだ成長途中です。夢を叶えるためには、大学で学ばなければなりません。これからも一つ一つ挑戦していこうと思います。そしていつか、自分も誰かの心に「頑張ってみよう」という熱い火を灯せるような病棟保育士になりたいと思っています。

作文を書くに当たって

この作文を書こうと思ったきっかけは、日頃から私を支えてくれる周囲の人達に感謝の気持ちを伝えたいと思ったからです。またこの作文を通して伝えたいことは、どんなに小さな挑戦でも、自分から求めた挑戦であれば、たとえ失敗しても、そこから多くのことを学ぶことができ、自分の力や自信につながるということです。